

11月第2週の礼拝説教

■日 時：2022年11月13日（日）10：30－11：30 降誕前第6主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「わたしは主を見ました」

■聖 書：ヨハネによる福音書20章11～18節（新約 p209）

■讃美歌：325「キリスト・イエスは ハレルヤ、」474「わが身の望みは」

先週一週間は、晴れの日が続いて穏やかな晩秋の時を過ごすことができました。11月8日の夜は、教会のタイサンボクと並べて見た皆既月食の月が幻想的な雰囲気でした。まだ、天文学などない時代には、このような大空の不思議な現象などはまさに様々な宗教によってさまざまに解釈されて来たことでしょう。そのようなことを思いめぐらしたひと時でした。

ところで、先ほど聖書をお開きいただいて、司式者の朗読をお聞きになった時、皆さんは、「この箇所はイエス様が復活なさった場面ではないか。イースターでもないのにおかしい」と思われたかもしれません。本来はその通りなのですが、この箇所を選んだのは、9月4日の主日礼拝から取り上げています使徒信条とつながりがあると思うからです。ちょうど本日で10回目になります。先ほどもご一緒に告白しましたが、使徒信条の文言の中の主イエス・キリストを告白している箇所を今一度思い出していただきたいと思えます。本日は、その中で「**三日目に死人のうちよりよみがえり、**」という箇所について、ヨハネによる福音書20章11節から18節と関連付けながら考えてまいりましょう。

一般に、キリスト教とは主イエス・キリストの復活にその基が据えられていると言われていきます。言い換えれば、主イエス・キリストの復活こそ、私たちの救いとそれによって与えられる喜びの中心なのです。しかし、キリスト教のカレンダーの中で、イースターほど説明が困難な事柄はありませんし、また、信仰を持つとする時に躓きになることもあります。使徒信条の文言で言えば、「**主は聖霊（せいれい）によりてやどり、処女（おとめ）マリアより生れ、**」と「**三日目に死人のうちよりよみがえり、**」という箇所です。それらのことさえ主張しなければ、私はキリスト教を信じてよい、と語られる方にもたくさんおられます。しかし、キリスト教からこれらを省いてしまったならキリスト教ではなくなってしまうのです。それほど重要な箇所なのです。

ところで、主イエス・キリストの死人のうちよりのよみがえりは、週の初めの日、つまり日曜日の朝の出来事でした。そのことを覚えて、キリスト教会は日曜日を「主の日」と呼

んでその日に礼拝をささげてきました。つまり教会は毎週日曜日に主イエスのよみがえりを祝いつつ歩んでいるのです。主イエス・キリストの活動なされた時代のイスラエルのカレンダーは、ユダヤ教によっていますから、安息日が中心であり、その日には旧約の律法の中心である十戒の第四戒「安息日を心に留め、これを聖別せよ。」という戒めを厳格に守っていました。けれども、主イエス・キリストが復活なされたのが週の初めの日の日曜日にあたりますので、キリスト教はその日を礼拝の日とするようになりました。

さて、ヨハネによる福音書 20 章 11 節以下にまいりましょう。11 節に、「**マリアは墓の外に立って泣いていた**」とあります。ここに描かれているのは、深く慕っていた存在を失って悲しみ嘆き泣いている一人の女性です。また、マルコによる福音書ではその光景を「**婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。**」と記し、私たち人間の日常生活にとっては異常なものであったことを明らかにしています。そのような震え上がり正気を失うような恐ろしさや悲しみ嘆きの中にいる者が、どのようにして喜びあふれるものへと変えられていったのか、主イエスのよみがえりの日とはそのことを深く考える時でもあるのです。ですから、私たちが毎週礼拝に集ってくる主の日もまた、同様の意味を持つことを忘れてはならないのです。

このマグダラのマリアは、夜が明けるのを待ちかねるように、朝早く主イエスを葬ったお墓に行きました。他の福音書とは異なり、ヨハネによる福音書では、既に主イエスの遺体は埋葬の段階で丁寧に処置がなされていますから、マリアは、何か用事があって墓に行ったわけではありません。愛する主イエスが殺されてしまったという深い悲しみが彼女を捉え、ただ主イエスを偲ぶためにお墓にいったのです。しかし彼女が墓に行ってみると、蓋をしていた石が取りのけてあり、主イエスの遺体はそこにありませんでした。彼女は主イエスの死の悲しみの中で、その遺体が埋葬されているお墓に行き、主の傍で泣くことをせめてもの慰めとしたいと思っていたのでしょう。親しい者を亡くした多くの方々がそのようにして、やがて立ち直っていくということを私たちは知っています。しかし、そのような慰めすらも取り去られてしまったマリアの深い悲しみ嘆き、そして絶望から、主イエスのよみがえりの朝は始まったのです。

では、よみがえりの出来事とは、一体どのようなものであったのでしょうか。ヨハネに

よる福音書だけが、マグダラのマリアと二人の天使のやり取りが記されています。彼女は泣きながら、なおも、死んでしまった主イエスの遺体を捜し求めて天使に訴えているのです。そして14節「**こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった**」とあります。マリアの後ろに主イエスが立たれたのです。「誰かが」ではなくて「**イエスの立っておられるのが**」とヨハネははっきり語っています。復活した主イエスが後ろに立っておられるのをマリアは見たのです。けれども彼女はそれがイエスだと分かりませんでした。主イエスは「**婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか**」と語りかけます。「もう泣く必要はない。あなたが捜している私が、生きてあなたの目の前にいるのだ。それが分からないのか」という問いかけです。しかし、マリアはその人のことをお墓を管理している園丁だと思って「**あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります**」と言いました。マリアはあくまでも十字架で死んだ主イエスの遺体を捜しているのです。それを自分が引き取り、改めて埋葬して、その墓で主イエスの思い出に浸り、涙を流すことだけを願っているのです。そのような彼女の強い思いが、主イエスが生きている姿で彼女の目の前に現れても、それが分からないほどに彼女の目を塞いでしまっています。ヨハネ福音書が語っているのは、このように悲しみの中に閉じこもり、まことの慰めを拒んで涙を流している人間の姿なのです。

ところが、16節で、主イエスが2度目に「**マリア**」と名前でお呼びになると、彼女は振り向いて、「**ラボニ(先生)**」と言います。彼女の前に立っているのは、確かに生前にそのようにお呼びしていたお方であり、確かに三日前に十字架につけられてお墓に葬られたお方だったのです。こうしてマリアは、目の前に立っている人が、よみがえって生きておられる主イエスであることを知らされたのです。彼女がよみがえりの主と出会い、悲しみ嘆きの暗闇から喜びと希望の光の中へと出て来ることができたのは、主イエスの「**マリア**」という語りかけによってでした。主イエスはここで、前の15節のように「**婦人よ**」ではなく、マリアの名前を呼んで下さったのです。マリアがよみがえった主イエスと出会った、その場面で「**振り向いて**」と記されていることに注目したいと思います。墓の前に立って泣いていたマリアの後ろに主イエスが立たれたのです。マリアは振り向いて主イエスと出会ったのです。実は既に14節にも、「**こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた**」と語られています。マリアが振り向いたことをヨハネによる福音書の著者は二度語って強調しているのです。この「振り向く」の元の言葉の意味は、まず空間的に身体の向きを変え、さらに心の向きを変えることでもあり、悔い改めて神に帰るということでもある、と言われます。マリアはよみがえった主イエスに名前を呼ばれ

て語りかけられることによって、これまでの人間的な常識や経験や知識の一切を捨てさせられ、よみがえりの主イエスが直接出会ってくださるという経験をするのです。私たちもマリアのように一人ひとりが名前を呼ばれており、それに応答して振り向くと、そこにはよみがえって今も生きている神の子イエス・キリストがおられ、私たち一人一人を主イエスと共に生きることに招いて下さっているのです。それは言い換えれば、主イエスを死の力から解放し、復活と永遠の命を与えて下さった主なる神の恵みの中で生きる新しい人生へと招かれているということでもあるのです。

18 節に記されるように、その後のマリアの歩みは、「わたしは主を見ました」と告げ続け、主イエスからの使命を伝える以外にはありませんでした。私は、キリスト教の伝道とはここから始まっていると考えています。そして、私たちもまた、彼女に続く者として歩み続けていくのです。それが、今もなお、主イエス・キリストのよみがえりを喜び祝う主の日の礼拝ごとに起こっている本当の救いの出来事なのです。